

である。そういう移行の爲め自体が社会の営みであり、教育はどこまでも、社会的な性格をもっているといえるのである。

教護院におけるソーシャル ケースワークについて

平 野 真 隆

最近、児童福祉の焦点が要保護児童対策から、健全育成へと移り、或る意味では巨視的になったともいえるが一面ますます複雑化する社会機構、生活用式から激増すると思われる青少年問題も大きな社会問題としてとりあげられている。そこで児童福祉施設である教護院は、今日に於いても、また将来、非行児対策の中核的存在として、その役割はますます重要となっていくことであろう。

教護院は児童の福祉を保障するという根本精神にのつとつて教護されなければならず、対象となる児童は、何らかの素質的、環境的欠陥により社会生活に適応できず

反社会的行為をするものを收容保護して、社会的適応性を付与することを目的とするということが出来る。今日の教護院は、感化法制定を時点として、少年教護院の時代から社会事業の一部門として発達し、その伝統と経験の上に運営管理されているが、現在の教護体制をかんがみるとけつして十分なるものではない。即ち非行の現状に適応した教護がなされているか、また真に対象児童のニードに應ずる教護がなされているか疑問である。まず望まれることは、教護院の役割と使命を明確にし、再認識すると共に、それによつて新しい教護体制が生れて来なければならぬ。そのためには、先ず教護理念の確立が必要となる。別の言葉でいえば教護学が確立され、その理論が実際に展開されなければならない。私がとりあげた、近代社会事業の独特の専門技術の一つである、ソーシャル・ケースワークが、教護理念の一分野として活用されることによつて、より教護効果を高めんとするのであり、ケースワークの理論が教護院においても実践されなければならないのである。

ケースワークの理論実践が我国に入つてから各施設に

においても、その目的と機能に応じて展開されてきた。それはケースワークが最も科学的技術であるという点からおおいにもちいられるようになったのである。しかし今日では、教護院のみならず、各施設においても何とかケースワークらしい独自の理論で実践されており、それは単なる諸科学の応用にすぎず、また簡略化されており、ケースワークの本質が忘れられているのである。然るに教護院においてケースワークが、固有の専門領域を持つた科学として、独自の指導分野として活用されるためには方法的にも組立られ研究されねばならない。そこで初めてケースワークと云う言葉が教護院においても使われ理論実践が可能となるのであり、ケースワークが教護技術の中に、一専門領域を占めるのである。

さて、教護院の持つ特殊な条件によつて、当然ケースワークの一般的理論や技術は、特殊化され専門化されなければならず、実際に導入されるためには、修正される必要がある。しかし、ケースワークの一般的理論と、教護院の特殊的理論を相互に作用させ、統合させていくということも、本来の社会福祉的援助といえるのであり、

より発展するのである。結局、科学的な裏づけのある教護の原理と技術をもつて対処しなければならず、広く深い人間の理解、社会研究の基礎に立つて、非行児童、非行問題を理解洞察する必要がある、児童の人格の歪みを治療し、再教育することにある。例えば、不良行為とか不良児だけの観点に立つた教護では消極的であり、真の教護とはいえない。たとえ反社会的、または異常性格と呼ばれる子供であつても、人間として当然、尊重されなければならず、社会に貢献することができるということを忘れてはならない。このように教護院は人間形成の場であり、一応完成されることによつて社会に出た場合健全なる社会生活を送つて行くことが出来るのであり、また再犯を防ぐことにもなるのである。そのためには、個人個人の能力が最高度に発揮され、「個人の社会適応性」ということに重点が置かれなければならない、各人各様なる指導が必要となる。

教護院における教護は、整備された環境の中での生活を通して、個々の児童をその環境に順応させ、適切な教育をすれば、自然のうちに、本来の正常なる生活態度

にもどるのである。即ち環境の力によつて治療するのであるから、個人をよりよく環境に適應させ、調整することが大切である。そこにケースワークの技術が必要となり、また集団治療、グループワーク等の技術が要求されるのであり、それらは密接に関連している。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。